

修士論文(要旨)

2019年1月

二言語環境で育った在日韓国人青年のアイデンティティ
—韓国への留学がもたらした影響—

指導 齋藤 伸子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

215J3009

廣瀬 萌

Master's Thesis (Abstract)
January 2019

The Impact of Study Abroad in Korea on the Identity of Korean Youth in Japan

Moe Hirose

215J3009

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

はじめに	1
第1章 研究背景と目的	4
1.1 日本における在日韓国人の歴史的背景	4
1.2 在日韓国人の教育事情	6
1.3 韓国人の教会コミュニティ	7
1.3.1 韓国人とキリスト教	7
1.3.2 協力者が通う教会の概要	9
1.4 研究目的	10
第2章 先行研究	11
2.1 アイデンティティ	11
2.2 継承語教育とバイリンガリズム	12
2.3 言語とアイデンティティ	15
2.3.1 アイデンティティに影響を与える要素	15
2.3.2 在日韓国人の言語使用状況	16
2.3.3 在日韓国人の言語とアイデンティティ	20
第3章 調査概要	22
3.1 調査協力者家族概要	22
3.1.1 家族プロフィール	22
3.1.2 家庭内言語使用状況	23
3.2 分析方法	24
3.2.1 ライフストーリー	24
3.2.2 複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model)	25
3.2.3 TEM で用いられる概念	27
3.2.4 TEM で推奨されている法則	29
3.3 調査方法	30
3.3.1 協力者 A へのインタビュー	30
3.3.2 家族へのアンケート	31

第4章 調査結果および分析	33
4.1 協力者家族へのアンケートの記述	33
4.2 TEM 分析結果	34
4.2.1 本研究における意味づけ	34
4.2.2 第Ⅰ期：「日本人みたいなもの」	38
4.2.3 第Ⅱ期：「周囲から認められない韓国人」	41
4.2.4 第Ⅲ期：「韓国人に認められた在日韓国人」	44
4.2.5 第Ⅳ期：「日本語の方が流暢だけど、韓国語も話せる在日韓国人」	46
4.3 言語使用率から見る変化	47
4.3.1 韓国語 10%、日本語 90%	48
4.3.2 韓国語 20~30%、日本語 70~80%	49
4.3.3 韓国語 50~90%、日本語 10~50%	50
第5章 考察	51
5.1 分岐点に影響を与えた SD・SG	51
5.2 留学中に経験した言語や母文化接触が与えたアイデンティティへの影響	53
5.3 言語(使用、能力)とアイデンティティの関係性	54
5.4 継承語としての韓国語	54
5.5 総合的考察	56
おわりに	59
参考文献	
参考 HP	
資料	

稿者が韓国へ留学した際、韓国で自分のルーツを探しに日本から来た在日韓国人と出会うことが多かった。日本社会において韓国・朝鮮籍をもつことや韓国・朝鮮語を話せることはプラスにはならないとみなし、日本に在留する日本で生まれ育った韓国人の中には韓国語を話せない人も多い。このような背景から、本研究では日本で日本語と韓国語の二言語環境に育った日本生まれ育ちの韓国人青年に着目し、インタビューによる本人の語りから、親の母国である韓国への留学を選択し、母語や母国と向き合った経験がどのような影響をもたらしているかアイデンティティを中心に調査し、考察を行う。

日本国内における在日韓国人の子どもの教育の選択肢は多様であるが、居住地によって左右され日本の学校を選択する親も少なくない。梶田(1997)は日本の学校における外国人児童・生徒への教育的対応として、アイデンティティ形成の重要性を訴えており、アイデンティティに影響を与える要素として言語や異文化接触など様々な要素がある。カミンズ(2011)はバイリンガル児における母語の役割の重要性の1つとして、母語教育や母語容認を主張している。一方で中島(1998)は、日本では日本語が圧倒的に優勢なことばで、政治的にも経済的にも文化的にも日本語一辺倒の国であるため、1つのことばしかできないモノリンガルになってしまう傾向が強いと述べている。Landry & Allard(1992)は、子どもの2言語発達に影響を与える要因を提唱しており、その中にコミュニティが存在する。本研究の調査協力者は韓国系キリスト教会というコミュニティと深く関わっており、アイデンティティに強い影響を与えている。調査協力者の家庭では子どもは韓国語をほぼ使用しないが、両親は韓国語を常に使用しているため、教会だけでなく家庭でも韓国語接触がある。

本稿ではライフストーリー研究の手法を採用し、ライフストーリーの分析に複線経路・等至性モデル(TEM)を用いる。TEMから発展した複線経路・等至性アプローチ(TEA)という手法も存在するが、TEAは「複線経路・等至性モデル(TEM)」、「歴史構造化招待(HSI)」、「発生の三層モデル(TLMG)」を統合したアプローチである点がTEMと異なる。

調査協力者は日本生まれ日本育ちのAとその家族3名(父親除く)の計4名であり、協力者Aはインタビュー形式、その家族はアンケート形式で調査協力している。TEMで述べられているトランス・ビュー的TEM図を目指すため、調査協力者に3回会い、その過程で試行的に作成したTEM図を実際に用いながら面接を行った。調査協力者Aが「在日韓国人アイデンティティをもつ」ことを等至点(EFP)として設定し、インタビューから得た協力者Aのライフストーリーを時系列に並べて再構成し、再構成されたライフストーリーを第Ⅰ期：誕生から高校「日本人みたいなもの」、第Ⅱ期：大学入学から留学前「周囲から認められない韓国人」、第Ⅲ期：留学中「韓国人に認められた在日韓国人」、第Ⅳ期：留学後「日本語のほうが流暢だけど、韓国語も話せる在日韓国人」の4つの時期に分類し、等至点に至るまでの経路をTEM図で示す。

経路の分岐にかかる社会的方向付け(Social Direction: SD)と社会的助勢(Social Guidance: SG)を重視しながら、言語(学習、使用、能力、意識)および母文化接触が与えた自己アイデンテ

ィティや、社会的アイデンティティを中心としたアイデンティティへの影響を多角的に捉え、分析を行った。親の母国である韓国への留学経験がもたらしたアイデンティティの影響については、①母文化接触がアイデンティティの方向付けをした、②言語がアイデンティティ確立への要素の1つとなったが、言語だけではない、③アイデンティティが確立されると社会的方向付け(SD)がアイデンティティへ影響されにくいことが分かった。また、言語とアイデンティティの関係性については、①言語使用や言語能力とアイデンティティが比例するような関係性は見られない、②帰属意識は言語とあまり関係をもたない場合もあった。その他にも思春期、青年期においてコミュニティへの参与が継承語意識に大きな影響を与えた。留学経験がもたらした継承語意識の変化としては、①継承語はルーツを辿る際に重要な役割を果たすことを認識したが、②子どもにとって継承語が親子を繋ぐ言語である意識が母親よりも薄く、③日本では日本人らしさが大切という意識は消えていなかった。

今回分析方法として TEM を用いたが、ライフストーリーも重視していた本研究において TEM は非常に有能的に作用し、ライフストーリーと TEM 図の併用はよりよい分析結果へと導けた。TEM 図を作成するにあたり、社会的方向付け(SD)と社会的助勢(SG)の判断が難しかった。特に大学入学後にかかっている SD が等至点から遠ざけている協力者 A の感情もあれば、結果として等至点へと働いた力でもあったため、今回はその時の心情を重視して SD へ分類したが、SD と SG は両面性をもつ社会的出来事もあるのではないかと考える。

参考文献

- 生越直樹(2005)「在日コリアンの言語使用意義と其の変化—ある民族学校でのアンケート調査結果から—」真田信治・生越直樹・任榮哲編(2005)『在日コリアンの言語相』pp.11-52 和泉書院
- 梶田正巳・松本一子・加賀沢泰明編著(1997)『外国人児童・生徒と共に学ぶ学校づくり』ナカニシア出版
- カミンズ,ジム著、中島和子著訳(2001)『言語マイノリティを支える教育』慶應義塾大学出版会
- 桜井厚(2005)「ライフストーリー・インタビューをはじめ」桜井厚・小林多寿子編著(2005)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門—』第1章, pp.11-70 せりか書房
- サトウタツヤ編著(2009)『TEMではじめる質的研究・時間とプロセスを扱う研究をめざして』誠信書房
- 志水宏吉・清水陸(2001)『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる—』明石書店
- 谷富夫(1995)「エスニック社会における宗教の構造と機能—大阪都市圏の在日韓国・朝鮮人社会を事例として—」『人文研究』第47巻, pp.1-18 大阪市立大学文学部紀要
- 中島和子(1997)「継承語としての日本語教育序論」中島和子・鈴木美知子編(1997)『継承語としての日本語教育—カナダの経験を踏まえて—』pp.3-20 カナダ日本語教育振興会
- 中島和子(1998)『バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること—』アルク
- 中野卓(1995)「歴史的現実の再構成」中野卓・桜井厚(1995)『ライフストーリーの社会学』pp.191-218 弘文堂
- 任榮哲(2005)「在外韓国人の言語生活」真田信治・生越直樹・任榮哲編(2005)『在日コリアンの言語相』pp.53-86 和泉書院
- 原裕視(1995)「異文化接触とアイデンティティー問題提起にかえて—」『異文化間教育』第9号, pp.4-18 異文化間教育学会
- 箕浦康子(1995)「異文化接触の下でのアイデンティティー理論枠組構築の試み—」『異文化間教育』第9号, pp.19-36
- 宮崎幸江(2014)「多文化の子どもの過程における言語使用と言語意識」『上智短期大学部紀要』第34号, pp.117-135
- 村岡英裕(2002)「質問調査:インタビューとアンケート」J.V.ネウストプニー・宮崎里司『言語研究の方法:言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』第2部, pp.125-142 くろしお出版
- 安田裕子(2012)「複線径路・等至性モデル(TEM)—人生の径路をとらえる—」サトウタツヤ・若林宏輔・木戸彩恵編『社会と向き合う心理学』pp.47-64 新曜社
- 安田裕子・サトウタツヤ編著(2012)『TEMでわかる人生の径路・質的研究の新展開』誠信書房
- やまだようこ(2000)「人生を物語ることの意味」やまだようこ編著(2000)『人生を物語る—生成のライフストーリー—』第1章, pp.1-38 ミネルヴァ書房